文　化

神道のこころ 欧州に響け

◇来年で神主歴25年、オランダ唯一の神社で宮司務める◇

ポール・ド・レオ

「一揖（いちゆう）（軽いおじぎ）、一拝、二拍手、一礼」。厳かに響き渡る声に続き、皆で手を打つ。古式にのっとった節分の祭りが始まった。少し様子が違うのは参加者がヨーロッパ系、アジア系と多様なこと。そう、ここは日本ではない。様々な民族が集まる国際都市、オランダのアムステルダムだ。

◆◆◆

出合いは約30年前

私は神主。日本の古神道の一派、山蔭（やまかげ）神道に入門し、オランダで唯一の神社「日蘭親善斎宮」の宮司となった。四季の祭りに結婚式といった様々な儀式。欧州に神道のこころを紹介しようと活動を続け、神主歴は来年で二十五年を迎える。

神道との出合いは三十年ほど前のこと。オランダのライデン大学で演劇と現代文学を学んだ私は、卒業後、ある演劇集団を主宰していた。七七年にパリで演出家のピーター・ブルックが開催した日本の伝統文化や芸能に学ぶワークショップに参加。そこで日本文化の基礎である神道の授業を受けたのだ。

授業では、事前に必ず道場をぞうきんで掃除した。学ぶ場を清めることで、自分の心もきれいにする考え方に私はひかれた。俳優として自分の心と芸術との関係に悩んでいた時期でもあったため、「神道から答えが得られるのではないか」と直感したのだ。

「日本で本場の神道にふれたい」。そんな私の願いに、ワークショップの先生が山蔭神道を紹介してくれた。当時、日本人以外を受け入れてくれるのは山蔭神道くらいしかなかったのである。

ロッテルダムで行われた藍染め展の開会式

◆◆◆

冷水使い耐寒訓練

さっそく山蔭神道の宗主、山蔭基央（もとひさ）先生に手紙を書いた。ほどなくして来た返事には、「来てもいいが、厳冬の海に入っての禊（みそ）ぎなど、修行はつらいことばかりだ」とあった。あとで先生に聞いたら、「あれだけ厳しいことを書いたのだから、まさか来ないだろうと思っていた」という。現実の私はまったく反対。入門までの一年間、冷水シャワーを浴び、寒さに耐える訓練をしたのだ。

七九年一月、当時は静岡県の浜名湖畔にあった山蔭神道の道場、貴嶺宮（きれいぐう）に入った。「百ケ日の行」を通じ、神道行法を学ぶためだ。そこでの生活は、すべてが修行だった。くみ取り式のトイレや風呂場の掃除、食器洗いまで。始めはぼーっと他のことを考えながらの作業が、次第に精神統一をし、無心になるための大切な時間となってくる。

海での禊ぎは毎朝だった。ハチマキをしめ、ふんどし姿で海に入る。真冬なら水温はセ氏三度ほど。事前の訓練もあって何とか耐えたが、暖かい寝床を飛び出て海に入っていくのはまさに自分との闘いでもあった。

百日修行の後半に出かけた「行脚」も懐かしい。白衣に笠（かさ）の姿。民家に寄ってはお祈りをしてお布施をいただくのだが、そのうちお布施は大切ではなくなる。ある家でお祈りをしていると、男の子が近づいてきて、ほほ笑みながら「サンキュー」と言ってくれた。つたない祈りが、自分だけでなく他人の心もきれいにできる。「もらうのではなく、与えることが神道のこころだ」と、行脚修行は教えてくれた。

百日修行を終えてオランダに戻り、八一年に神主としての資格を授かった。瞑想（めいそう）などを通じて神道の勉強をしたいという人々も徐々に増え、自宅の一室にあった祭式の場も、九〇年には新築のビル内に移転することができた。

祭神はオランダの国を守る「ホラント（オランダ）クニタマノカミ」ら三柱。クニタマノカミの聖地は三年ほど全国を車で探し回り、ようやく見つけた。オランダ中部の国立公園の中で、一本の大木がすっくと立つ、とても静かな場所だ。

祭礼で読み上げる祝詞は日本語だけでなく、オランダ語で自作することも多い。「オランダで大地の恵みに感謝するなら、自然とその言葉は土地のものになる」と山蔭先生が教えてくれた。

◆◆◆

日系企業から依頼

私の活動が欧州の日系企業に知られ、彼らの新しい工場やオフィスの地鎮祭、竣工（しゅんこう）祭を執り行うようにもなった。オランダだけでなく、ベルギー、ドイツ、チェコなど、日系企業の進出に伴いけっこう忙しい。オランダ人同士の結婚式も大歓迎。家族ぐるみで神道や日本文化に関心を持ってもらおうと、七五三のお参りも始めた。

今後は神道とは何かを簡潔にまとめた解説書を書いてみたい。日本と同じく欧州も金銭や物欲が第一の物質主義が浸透している。しかし、それでは現代社会が直面する環境破壊などの問題に対処できなくなっていることに気付き始めた人も多い。常に心を外界に開き、自分の持っているものを人に与える神道の考え方は、欧州の人々の心にも響くところがある。そう信じて活動を続けている。（日蘭親善斎宮宮司）